

か。その少年時代に於て、佛國宣教師に師事して傳道旅行にも従ひ歩いたと聞きては其純潔なる胸裡に何故神の存在やイエスの人格や、罪の赦しや、犠牲の生涯や、聖書の何たるかを印象せられざりしと信じ得らるゝか、且つ又老いて宰相の椅子に在るや時に郷里に歸りて黄檗宗の菩提寺に至りて禪僧と談笑しむたるを聞きては、何故彼が宗教の奥義即ち歸着點を握らざりしと信じ得るか。

しかのみならず彼が遺言の一部を見るに及びては、是れ全く徹底したる者の心事にあらずして何ぞ。特に菩提所に於てチャンと墓地を區劃し、且つ又位牌の文字まで書き遺しむるを見ては、何人と雖も大悟徹底しむたるを思はざるを得ないであらう。

宗教の文句を口にするものが、宗教を體得し居るものとは速断すべからず。宗教家に觸れ、その教ゆる處を會得し、之を實踐躬行する者こそ宗教に通じ居るものとせざるを得ず。

恐らくは基督教を聞き、佛教特に禪宗を聞きしものにして、全く名利を脱却し、死

生を超越し、死亡廣告の文章まで撰定し、平然として邦家の爲に一身を投じ、日夜努力して他を顧みざりし此人に對しては、何人と雖も自ら省みて耻ぢざるを得ないであらう。

私は日本國民が原氏の死によつて、名利の念、死生の思に驅られて生活する愚を耻ぢて、本心に立ち還り、一齊にその血を以て洗禮を授けられし氣持がする。

新島襄先生は私に告げて、一國の救はるゝには、幾多義人の血を要すと曰はれた。實に然りと思ふ。涙をもて蒔きし者は、涙をもて刈らざるを得ぬ。血をもて播きしものは血をもて刈らざるべからず。

(十年十一月十一日)

今日は華府會議の開かれる日だ。之を思ふても唯神を信じイエスを信ずればよいのだ。全世界の大勢は神とイエスに指導せられてゆくのだ。神とイエスに逆ふて大戦争を始め、大に懲戒せられて改悛し、神とイエスに従はざるを得ぬ様になつてゆきつゝあるのだ。

汝等愛せらるゝ、兒童の如く神に倣へ、又愛を行ひイエスが我等に代りて犠牲となりし如くせよと、パウロの勸めるのを思ふて、如何にも崇高の念に驅られざるを得ぬ。クリスト教なるものは、天に則り聖人に則る事を尋常茶飯の如く取扱ふてゐる。幼稚園の兒童にも大學院の學生にも、丁稚小僧も、英雄豪傑も、等しく聖徒たらざるを得ざらしめるのだ。

* * * * *

野村隈畔君は逝いた。自由の天地を憧憬して！美の天地を憧憬して！之を思ふと我もその自由と美の別天地にあこがれて、あゝ懐かしの都ぞと戀ひ焦るゝの思がする。而して彼の心臓中に湛えられし一掬の血は、この天地に廻りゆき、とこしへの春を樂むやに思はれて歡喜に堪えぬ心地もする。

然し斯の如く感ずるが爲に、此の世を去りて彼世に急ぐは、一を知りて未だその二一を知らぬのだ。此の世にあつて本心と一となりて働く自由の樂みを知らぬからの事だ。

神と一となりて働く樂しさを知らぬからだ。罪のなき汚點のなき疵のなき生活の歡喜を知らぬからだ。日々のパンも水も神の使によりて捧げられ、鳥によりて養はれる奇蹟を知らぬからだ。クドイ様だが、生れ來ると同時に、我が口に含められし乳は、母の乳房より湧くと思ふて之れが天より流れ來りゐる秘密を知らぬからだ。天を見ても地を觀ても、神の榮光の輝き亘りゐる美の極を知らぬからだ。要するに救はれてゐないからだ。

私は是に於てクリスト教はプラトーンやカントの如く人格の完成を此の世に於て望むべからざるものとして、未來を望む哲學思想とは、根本的に相違するを認めざるを得ぬ。

クリスト教に於ては、人格の完成は此の世に於てこそ得らるゝ者とするのだ。例へば嚴正禁酒は後の世に於ては無意味である如く、凡ての律法は此の世に於て成就せらるゝのだ。罪を犯さぬものとなるのは、後の世に於てではなく、此の世に於て誘はる

も罪を犯さぬものとなることだ。

人間は此世に於て完全なる人物となれぬと云ふのは速断に失してゐる。孔子が心の欲する所に従ふて矩を踰へずと云ふてゐるのは、是れ即ち自由の境涯を説いてゐるのだ。ヨハネの「神に由りて生れし者は、罪を犯す能はず」と云ふてゐるのもその通りなのだ。

私は、鳥は鳥としての自由、人は人としての自由を有することを思ふ。假令人間は飛行機を工夫して鳥の如く翔り、またそれ以上に振舞ふとも、物質に即したる自由にして、物質を離れたる自由ではない。

私共はまづ此の世に於て、内在の神と一となり、「小天地」たる身體を自由に統御する者となりて然る後に大天地を自由に統御するものと一となるがよい。此の内なる小天地すら自由に統御する能はずして、驅け出すとは以ての外である。「うるたへ者！」の一喝を喫はさねばならぬぞ哀し。

然し一羽の雀も天に在ます父の許なくば地に落つるものではない。鐵砲でも短刀でも風でも海でも、また微菌でも思想でも、神がその人の死を許し給ふにあらずば、何人も死するものではない。隈畔君の死も天に在す父の許し給ふたのである。

神は一莖の艸をも空しくは生存せしめぬ。必らず宇宙經綸の一として、なくてはならぬものとして用ひ給ふものだ。凡ての人の死も神の意に基きて意味あるものだ。假令それがイエスの死とユダの死の如く、全く相反する様に見ゆるも、等しく神の經綸の一として用ゐられてゐると思はれる。

隈畔君の死は、その生が他人に異りてゐる様に、また異りてゐるのだ。神は彼をして斯く死せしむるが世の救の爲めに必要であつたのであらう。死を樂むは誠に壯美だ。然し神と俱に生を樂むはまた何等の壯嚴ぞ！

私は過る一月十日京都へ行いた。同志社中學生のために、一週間を滞在して宗教談を試みた。

海老名總長の談も聞いた。總長の日曜の説教に、クローンウエルはその娘に、お前の良人の顔に輝くクリストの榮光を視て之を愛せよと云ふたが、我等も同じくクリストの榮光の顔に輝くまでに至るべきだと結んだ。

私は之に共鳴した。何となれば其の前日（土曜）同志社青年會の集に於て一口話した時に斯く云ふた。北越から一人の青年が來りて私に話したのに、賀川豊彦氏の「死線を越えて」が非常に賣れると聞いたから何人が買ふのかと問ふたら、僧侶であると書肆は答へた。また一人の禪僧がクリスト教を信じて傳道するが郡長なども其の席上に列して聽聞してゐる。今日は宗教の理屈は聞きたくない、其の生命が如何にその人に感化を及ぼしてゐるかを見たい。それも其の人の話を聞くよりも其の人の顔を見て知らんとして居ると云ふたのだ。私は之を話した。

私は此北越の青年の話を聞いて社會の要求を知つた。クリスチャンはクリスト教の生命を體得して、其の顔色相貌まで變化せねばならぬのだ。パウロの「榮に榮いやまさりて同じ像に化るなり」と言へるはそれである。クリスト信者の理想としてクリストを憧憬する時代は過ぎた。今や之を體得し實現すべき時代になつてゐるのだ。

私はこの話をして翌日海老名總長の説教を聞いたのだから、自然に共鳴せざるを得ぬのだ。

然しもう一つ面白い事實を見てゐる。それは私が久しぶりに相國寺を訪ねたのは同じ土曜日で、青年會に行く二三時間前であつた。相國寺境内の林昌院に橋本獨山師が管長として住みゐると聞き、懐かしく思ふて訪問した。獨山師の顔は輝いてゐた。いろいろ話をして獨山師より僧堂の山崎大耕師を訪へとのすゝめを受けて訪問した。するとそれが峨山和尚の下に於て相識の人であつた。勿論私は見忘れてゐたが先方は私を一見してよく覚えてゐた。處がその大耕師の顔は非常に輝いてゐたのだ。

その時の話には一層面白い一節があつた。大耕師曰く『俺は此處へ一年前に聘せられて来たが、その時自分の寺は他に譲り所有物もそれ／＼人に分ち與へて行李一つで来たのだ。来て見ると本山より俺にくれる年俸が五圓なのだ。それが時節柄とあつて増額せられて貳拾圓となつたのだ。而して雲水より俺にくれる金が年に五圓である、之を合せて俺の年俸は勿驚二十五圓である。俺は少し豫算が相違した。然れども頭下げて貰い歩く事もいやだから、其の儘にしてゐると、不思議なものでいろいろ淨財が集まつてくるよ』と。

私は之を聞いて之にも大に共鳴した、而して云ふた。それが宗教家の立脚地なのだ、本來人間は無一物で世に立つてゐるのだ、それを天から支へてゆくのだ。その眞理を體得して人に示すのが宗教家なのだ。兎角人間は天より支へられてゐると云ふ實を忘れて、月給で生きてゐる蓄財で生きてゐる、職業で生きてゐるなど思ふてゐる。其處で一たび月給に離れなどと忽ち途方に暮れて狼狽するのだ。其の時宗教家はチャン

と其の生活の根本原理を教へて本來天がそれらの物を用ゐて支へてゐたのだ、天は月給によりて支へずばそれに代る物を用ひて、支へくる、は疑ふべきものでないのだ。それを證據立つるために俺を見よと、自らの生活を示す、是れが宗教家の役目なのだ。

私なども時とすると何もなくなるのだ。或年の暮夕飯とすべきものが無くなつた。その時子供等は先生如何しませうと云ふた、私は一寸祈つた。そうすると『庭に行け』との默示を受けた。其處で導かるゝまゝ庭に下りて竹垣のそばにゆき茂れる萩の枝を押し分けて見ると、大なる南瓜が一つ下つて居た。勿論夏から一莖の南瓜が突然萌え出て成長したのは見たけれども、それが餘りおそく出来たので一の實となるとは信じなかつたのだ。處が、チャンと何人も目にかゝらぬ様に一つの實が葉の下に大きくなつてゐた。私は直に庖丁を持って來なさいと子供等に命じた。先生何をなさいますかと怪しみながら持つて來た。庖丁を取つてその南瓜の實を切り取つて渡した時、子供等はアラツと云つて驚いた。私はそれを夕飯に料理したが、其の時から子供等は神

の支へをシミ／＼信ずる者となつた。

大耕師は私の話に釣り込まれて坐を更へて私に近づき歡待してくれた。其時師は海老名總長にも宗派などは抜にして互に打ちくつろいで話して見度いといふてゐられたから、私は總長の日曜の説教後に大耕師の希望を告げたら海老名氏も賛成せられた。

要するに實生活に入りて見ると、山上垂訓の眞味がアリ／＼と判明してくる。峨山和尚が空の鳥を見よ、野の百合花を見よ、先づ神の國とその義を求めよ、無くてならぬものは悉く與へらるゝ、一日の苦勞は一日にて足れりなどの句を読み、エライ／＼もうクリスト教を悪く云ふてはならぬぞと、雲水を警しめた事など思ひ出される。勞資問題、生活問題、經濟問題など彼此云ふも人間生活の根本問題の解決が付かずば、空中の樓閣にすぎないと断定して憚らない。

そうなると、クリストを信せよ、神を信せよ、聖靈の内住を自覺せよ、聖書を讀めよ祈りせよ、而して生命も生活も全く神の手中に擁護されてゐる事實を悟れよ、と呼

びたくなる。徹底したるクリスチャンとして神と共に歩め、イエスと共に生活せよと叫ばざるを得ぬ。(大正十一年)

十七 愛はいつまでも墮つることなし

江渡君のお宅へ參つた。お菓子も出た。お茶も出た。復チャン從子チャンはおとなしく遊んでゐる。六つや七つの子供さんは、お菓子のほしいものだ。然し二人は見向もせぬ。何と純潔なとよと感心してゐた。一泊して翌朝となつた。例の如く集りを開かうとして皆席についた。復チャンも席に列した。一人誰やらを待合せてゐた時、復チャンは云ふた『昨夜水が飲みたくてたまらなかつたが、兄サンを起すと寒からうと思ふて辛抱した』と。私は、獨語のやうに云ふてゐた復チャンの此物語に、しみ／＼動かされた。復チャンは根本的に靈化されてゐるのだ。昨日見た時に如何にもおとなしかつたのは大いに基礎のあることであつたのだと思ふた。

今日松崎老傳道者が見えた。其話に、先日下谷か淺草の明治病院と云ふに行き、そこに立ちゐる一人の看護婦を見て挨拶をし、遂に傳道をはじめた。さうすると二人の同僚を招き來つて三人して教を聞いた。歸宅後慰めの手紙を送りたるに、今日返事が來て愛の話を承はりて大層力を得たとの言葉であつた。因つて手紙を送りて左の一首を書き添えたとの事であつた。曰く

打てば鳴る鐘こそ君の心なれまことの愛ぞ生命なりける

私は松崎翁に復チャンの話をした處、翁も感心したが、私は思ひ出して覺えず涙の湛ゆるを感じた。

「愛はいつまでも墮つることなし」とパウロが云ふてゐる。即ち預言も方言も智識も廢る時代が來る。完全なるものが來た時には不完全なるものは廢るのだ。されども愛の廢る時はないと云ふてゐるのである。禪宗の僧侶が大悟徹底して後は如何にするか。即ち五戒十戒を研究して、嚴重に之を守るのである。キリストは神の誠を守り抜い

た、其誠は愛であつた。其愛の誠を分解すると、神を愛することと人を愛することの二つとなる。されども人の裏に神の住み賜ふを知りては、人を愛することは取りも直さず神を愛することになるのだ。キリストは其消息を説いてゐられる。基督教は寧ろ其處にあると云ひたい。

私は兎に角「愛」を誠として之を守る。而して其應用方法を「本心」に求むるのだ。言換ゆれば本心によりて働く、が愛の誠には戻らぬ様に注意する。愛は理想とする、實際は本心に據る。愛は目的とする、手段は本心に問ふと言ふてよい。若し愛と本心との衝突する場合には、疑はしき場合として、暫らく待ちて着手せぬのである。

一方より云へば私は本心と凡てが一致する場合を撰みて生活すべしと思ふのだ。其結果、愛も智慧も能力も、本心より流れ出づるものとなつてはじめて完きものだと思ふのである。假令神の智慧であつても、神の能力、神の愛であつても、我が本心を通過せずしては生命のなきものだと思ふ。パウロの如きもいろ／＼の事を信じた曉に、

何をするか、唯本心の責なからむことを努めてゐたのである。(使徒行傳二四一四一六參照)
「斷えず祈るべし、事ごとに感謝すべし」と云ふ語は、實生活に於て自然に必要な手段となり工夫となる語である。私は竹田默雷師に「窮した時に、祈るか」と問ふたら、「俺の方には祈は無い」と答へた。祈の無い人間には用は無いつと思ふた。何故ならば、世界第一の偉人なるイエスも、窮した時には祈りてゐる。私はイエスを學べば足れりと思ふたが、待て暫し、茲まで研究したのだから一步進んで「禪僧は窮した時に何をするか、」之を研究すべしだと思ひ定めて、他日往きて問ふことにした。一日參禪に行く途中急雨に逢ひ、會堂に入りて神に祈つた。「何と問ひませうか」と、その時「坐禪するかと問へ」と響いた。「よし」と思ふて直ちに驅け出し禪堂に至り「窮した時に坐禪するか」と問ふた。其時和尚は「窮した時も窮せぬ時も、今日も坐禪、明日も坐禪」と答へた。そこで禪の坐禪は基督教の祈であることを知つた。それと同時にパウロの「斷えず祈るべし、事ごとに感謝すべし」との一語は、苦心慘憺の結果發明した

る工夫を言ひ遺して呉れたものであると悟つた。

本心に立ち還り、本心と一つとなりて他を愛するのが眞の愛である。本心を離れた愛は如何に濃厚なるも本統の愛ではない。「打てば鳴る鐘こそ君の心なれまことの愛ぞ生命なりけり」との松崎翁の歌は徹底したる人の歌である。翁は禪は研究せぬなれども、實地の上より其處に達してゐる。

私は基督教徒の和歌として記憶してゐるものが今一つある。

静かなる心の奥に天地の聲なき聲の高くもある哉

と云ふのである。是れは「天命之謂性、率性之謂道」と書き出し、「上帝之載無聲無臭」と結べる「中庸」に現はれし儒教の面影が見えるが、松崎翁のは禪の面影が歴然として映じてゐる。いづれにしても遍在の神を識ると同時に、内在の神を識りたる人物には、實地上言語の一致するに至るは不思議である。

私は人が如何に七轉八倒しても、本心と愛とを引き離しては、人生はダメであると

斷言する。天地は失せむ、されど我が言は失せじと言ふて憚らない。それと同時に、
 本心と神とを引離しては、宗教も哲學も完全なるものでないと斷言して憚らぬ。

神を見る終

大正十五年二月二日印刷
 大正十五年二月五日發行

定價二圓二十錢



著 者 吉 田 清 太 郎
 發 行 者 東 京 市 京 橋 區 尾 張 町 二 丁 目 十 五 番 地 福 永 文 之 助
 印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 日 吉 町 十 番 地 渡 邊 爲 藏
 印 刷 所 東 京 市 京 橋 區 日 吉 町 十 番 地 民 友 社

發 兌

東 京 市 京 橋 區 尾 張 町
 振 替 東 京 五 五 三
 電 話 銀 座 一 一 六 九 七

警 醒 社 書 店

植村 正久著	信 仰 の 友	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
植村 正久著	靈 性 の 危 機	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
德永 規矩著	逆 境 の 恩 寵	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
綱島 佳吉著	逆 境 の 福 音	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
内村 鑑三著	苦 痛 の 福 音	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
内村 鑑三著	基 督 信 徒 の 慰 め	□ 定價七十錢 送料 六 錢
内村 鑑三著	求 安 錄	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
賀川 豊彦著	苦 難 に 對 する 態 度	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
武本喜代藏著	信 仰 に 生 きて	□ 定價一圓六十錢 送料書留十八錢
田中 龍六著	天 地 生 き 活 く	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢

島田三郎全集1	議 會 演 說 集	□ 定價四圓 送料書留廿四錢
島田三郎全集2	社 會 教 育 論 集	□ 定價四圓 送料書留廿四錢
島田三郎全集3	開國 ^{始末} 井伊大老傳	□ 定價四圓 送料書留廿四錢
島田三郎全集4	政 教 史 論	□ 定價四圓 送料書留廿四錢
大西博士全集1	論 理 學	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
大西博士全集2	倫 理 學	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
大西博士全集3	西 洋 哲 學 史 上	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
大西博士全集4	西 洋 哲 學 史 下	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
山本 一清著	星 座 の 親 し み	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
山本 一清著	火 星 の 研 究	□ 定價一圓五十錢 送料書留十五錢

山田寅之助著	耶蘇傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
柴田 勝衛譯	ハビニーきりすご傳(上)	□ 定價二圓十八錢 送料書留十八錢
波多野精一著	基督教の起源	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
小崎 弘道著	基督教の本質	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
賀川 豊彦著	イエスの宗教と其眞理	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿一錢
賀川 豊彦著	イエスの内部生活	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
賀川 豊彦著	福音書にイエスの姿 現れたるイエスの姿	□ 定價六十錢 送料 料 四 錢
道旗 泰誠著	阿彌陀佛より基督へ	□ 定價一圓五十錢 送料書留十六錢
小野 一樹譯	耶蘇の理解へ	□ 定價一圓五十錢 送料書留十五錢
門馬 紫苑譯	女處アデイナミイエス	□ 定價二圓 送料書留廿一錢

徳富健次郎著	小説 寄木	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿四錢
徳富健次郎著	小説 黒潮	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
徳富健次郎著	順禮紀行	□ 定價一圓八十錢 送料書留十五錢
永島 忠重著	野草	□ 定價一圓十錢 送料書留十五錢
山中峯太郎著	「彼れ在り」この直感	□ 定價一圓八十錢 送料書留十九錢
山中峯太郎著	我れ爾を救ふ	□ 定價一圓九十錢 送料書留十九錢
村田 勤編	我子の思ひ出	□ 定價二圓 送料書留十八錢
松村 介石著	リンコルン傳	□ 定價一圓 送料書留十四錢
松村 介石著	男女青年訓	□ 定價八十錢 送料書留十四錢
住谷 天來譯	カーライル英雄崇拜論	□ 定價一圓九十錢 送料書留廿一錢

別所梅之助著	運命以外の一路	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
別所梅之助著	山のしづく	□ 定價二圓三十錢 送料書留十九錢
別所梅之助著	武藏野の一角に立ちて	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
畔上 賢造著	宗教詩人としてのブラウニング	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
内村畔上共著	平民詩人	□ 定價一圓三十錢 送料書留十四錢
渡邊 善太著	舊約書の文學 預言文學	□ 定價三圓 送料書留廿一錢
渡邊 善太著	舊約書の文學 詩歌と劇	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿一錢
渡邊 善太著	舊約書の文學 歴史文學	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿五錢
柏井 園著	ヨハネ傳研究	□ 定價二圓八十錢 送料書留廿一錢
松本 雲舟譯	パンヤン天路歷程	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢

田村 直臣著	信仰五十年史	□ 定價二圓十八錢 送料書留十四錢
田村 直臣著	聖書辭典	□ 定價三圓 送料書留廿三錢
警醒社編纂	聖書の常識	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢
日高 善一著	基督者の常識	□ 定價二圓十八錢 送料書留十四錢
松本 雲舟編	日々の祈り	□ 定價八十錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	英和對照 愛哈	□ 定價五十錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	英余は如何にして 文 基督教徒となりしか	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	宗教座談	□ 定價七十錢 送料書留十四錢
日本基督教會編	我等の講壇より	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
山本美越乃譯	デビス新島襄先生傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢

下村孝太郎著	靈魂不滅觀	□	定價二圓八錢 送料書留十八錢
有馬純清著	心靈現象研究	□	定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
田中龍夫著	物質觀の革命	□	定價一圓四十錢 送料書留十七錢
木村徳藏著	兩性問題と生物學	□	定價五圓五十錢 送料書留三十錢
松村松年著	最近昆蟲學	□	定價三圓 送料書留廿五錢
留岡幸助著	自然と兒童の教養	□	定價一圓七十錢 送料書留十八錢
大川周明譯	リシヤル永遠の智慧	□	定價一圓五十錢 送料書留十八錢
牧野英一著	最後の一人の生存權	□	定價五十錢 送料四錢
吉田源治郎著	肉眼に見えぬ星の研究	□	定價三圓五十錢 送料書留廿一錢
久留弘三著	ホルムス暴力否定	□	定價一圓二十錢 送料書留十四錢

終

